

韓国におけるサルリムサリ研究の展開

JON Su-Jin
丁 秀珍

東國大學校

(訳：金賢貞)

日本民俗学会が2014年に主催した国際シンポジウムのテーマは「『当たり前』を問う！」である。本稿では、このテーマに沿って、韓国で展開してきた「サルリムサリ」(살림살이)研究を概観した上で、シンポジウム当日に行われた議論について個人的な意見を付け加えてみたい。

韓国語の「サルリムサリ」は、「さじ・はし、食器、ふとんなど、サルリム(살림・暮らし)に必要な所帯道具」をさすとともに、「暮らすこと」そのものも意味する。私は「サルリムサリ」を後者の広い意味で捉えている。なぜならば、この研究が生活財に限ったものではないことを強調して示したいからである。

韓国におけるサルリムサリ研究は、社会学、人類学、建築学、家庭学などの各学問分野でそれぞれの問題関心に沿って進められ、その学問的成果も多く蓄積されている。例えば、社会学の場合、1990年代の初めに、フランスのミシェル・マフェゾリ(Michel Maffesoli)による『日常生活の社会学』が韓国語に翻訳、紹介された後、日常生活は社会学の研究対象として浮上するとともに、その研究に取り組む一連の動きが現れた。とはいっても、既に1960年代から国レベルの「人口総調査」に参加し、計量的な方法で韓国人の日常的な所帯道具を調べる社会的作業は行われていた。しかし、日常生活という概念やその具体的な方法論および認識論を標榜し、独立した領域としての日常生活の研究はそれまでみられなかった。

民衆の日常的な暮らしを研究対象に据える民俗学では、その研究領域が過去或いは山間僻地に集中していたため、実際、いまの民衆の日常的な暮らしに焦点を当てて取り上げることは皆無に近かった。そういう意味で、2002年以降、韓国人のサルリムサリに関する調査を続けてきた韓国の国立民俗博物館(以下、「韓国民博」と略す)によるアーカイブ作業は注目に値する。韓国民博は2002年に日本の国立民族学博物館と共同で日韓両国の「生活文化交流展」を企画した。韓国民博のサルリムサリ調査やアーカイブ作業は、これを機に紹介された佐藤浩司の「生活財生態学」の概念や方法から少なからぬ影響を受けたと考えられる。この調査は、いわゆる「モノは語り、読める」という命題のもとで物質文化研究の一環として行われた。

現在、韓国民博の館長を務める千鎮基(チョン・チンギ)氏は、「大量生産・大量消費の時代」に際し、生産・消費される数万種類の生活財を収集・記録することは、「対象中心的」(object-oriented)というより、「概念中心的」(concept-oriented)でなければならず、「どれぐらいのモノが世帯にあり、それは果たして有用に使われているかどうか」、さらに「そこには、人とモノとのいかなる関係が潜んでいるのか」「モノはどういう家庭景観を作り出しているのか」¹など、モノの置かれた文化的コンテクストのなかでその意味を探るべきだと主張した。

このような認識にもとづき、韓国民博は、盤谷里・蔚山・阿峴洞・貞陵の4つの地域を対象

とした調査報告書を既に刊行しており、いまでも韓国民博の正式の業務である民俗調査に統合するかたちでサルリムサリ＝生活財の調査に取り組んでいる。具体的な調査方法は次のとおりである。まず、1つの「道」(日本の県に相当)のうち2つの村を選定し、調査者2人とカメラマン1人の3人1組体制で8ヶ月間村に滞在しながら民俗誌を作成する。通常3～4ヵ月後、当該村の代表性を帯びると認められる家を1軒選び出し、さらに2人の調査者を追加派遣した上で、その家の生活財をなるべく全体的に調査・記録する。調査対象となった家の生活財のうち寄贈されたものは、韓国民博の展示に活用する。また、一度調査された家に対しては15～20年ごとに再調査して、生活財の変化のあり方も捉えていくというのが基本構想である。千氏は、このように集めた資料を足掛かりにして様々な研究が行われることに期待を寄せているものの、韓国民博としてはいまのところ生活財の記録作業に重きを置いて実施していると現状を語った。

問題は、この種の資料にもとづいた有意義な研究が軌道に乗るまでどれぐらいの時間がかかるのか、また、蓄積された資料を通してモノの文化的意味の究明や、モノの置かれた文化的コンテクストの復元と理解が果たしてどこまで可能なのか、などであろう。さらに、生活財を韓国語の広義の「サルリムサリ」のように広く捉えた場合、この生活財の調査はモノをどういう視点から対象化し、解釈すべきなのかという問題にもぶつかる。

サルリムサリ調査の視点と解釈の問題は、このシンポジウムにおいても答えが出せないまま課題として残された。冒頭でも触れたが、このシンポジウムが問いかけようとしたのは、「当たり前」とされる我々の普通の日常のあり方である。こういう問題設定は、従来民俗学で注目されなかった日常を本格的な学問の対象として措定し、その追究に取り組もうとする試みとして重要な意義を有すると評価できる。当たり前すぎて問いかけたこともないもの。認識の枠組みからは捉えにくく、なかなか言語化し得ないもの。にもかかわらず、このような事象に注目すべき理由は、マフェゾリの唱えた「いま、ここで」(here and now) が示してくれるように、それらが最も具体的かつ直接的な社会的実在だからであろう。

一方、我々の日常を異文化に紹介するとともに、異文化との比較を通してその相違性或類似性を明らかにすることにも意味がある。しかし、それだけでは不十分な気がする。異文化と比べることによって我々の日常は差異化できるが、それは方法や手段であって、目的ではないからである。いま我々に与えられた緊要な課題は、眼前の日常に焦点を当てることが従来の民俗学に対してどのような批判的役割を果たせるか、従来のものとは違う新しい方法論を打ち立てるためには何をなすべきか、さらに、新しい方法論が民俗学の新しいパラダイムを示す上でいかに機能できるか、といった問いと向き合いつつ、その答えを出すことであろう。

韓国で翻訳・紹介された『日常生活の社会学』では、「日常生活の社会学」が新たな研究対象でもなければ独立した専門分野でもないことが強調されている。むしろ「社会学の視角」の新しい定義であり、社会を理解するパースペクティブなのである²。この新しいパースペクティブは、2つのレベルの現実が存在することを認めることから始まる。例えば、言語という体系としての現実がある一方で、その言語を用いる文脈的現実がある。理論的現実としての前者に比べ、後者は日常実践が繰り広げられる具体的な状況である³。

後者に属する我々の日常は、既に至るところに存在しているものの、「非可視的」という特徴がある。日常実践が非可視なのは、それ自体に含まれたパラドックス、つまり、「見えて

いるが、注目されない」からであり、さらに、理論的合理性によっては捉えられない「非論理的論理」(non-logical logics)によって営まれるからである。日常の実践は、ある時点で偶然に与えられるものによって常に影響されるため、局地的・流動的であり、「状況的な戦術」といえる。日常の実践はマクロなヴィジョンにはかかわらない「繰り返される断片」として、社会生活全般に散在しており、「常に繰り返されるが、決して完結しない」。日常の実践を導く合理性は一時的な「機会論理」に過ぎず、その実践の目的もまた「達成された瞬間に消えてしまうため」に、これを全体的に捉え得る理論的なパースペクティブは存在しない⁴。「日常生活の社会学」が社会に対する新たな定義であると同時にパースペクティブである理由は、上述したように、従来の社会学における認識論に極めて論争的な示唆点を提示しているからである。

しかし、「日常生活の社会学」論にも1つ問題が見受けられる。ケイロス(J. M. Queiroz)は、日常の非可視性ゆえに、そこにある種のミステリーや、見かけ越しの深い何かが潜んでいるということを前提にしているわけではないと強調する⁵。しかし、理論的現実やマクロなヴィジョンとは無関係に日常を規定してしまえば、これもまた日常に大きな意味を与えすぎることになりかねないだろう。言語の体系と使用とが同じでないように、理論的現実と日常とを2つの現実として区別する必要はある。しかし、だからといって、それら2つの現実が無関係に存在しているわけではない。

このシンポジウムが日常を「当たり前」と位置づけたのは、日常的な暮らしやその実践が有する固有な特性を浮かび上がらせるためだろう。しかし、日常を「当たり前」と捉えても、それは「無意識的」に或いは「自然な生活様式を構成」⁶して、伝承するとされてきた従来の民俗の概念とは明らかに異なる。

アパデュライ(A. Appadurai)は、グローバルな時代といわれる今日において個人の日常的な暮らしがいかにか構築されるのかに注目した。彼によれば、電子媒体や大量移住が日常化した現在のグローバルな環境のなかに置かれた個人の暮らしは、「ブルデューのいうハビトゥス(habitus)というより、意識的な選択と合法化、そして表象が争う場」⁷になっている。つまり、常時的な流動と移動が我々の暮らしを規定する状況下で割りと安定的かつ自然なプロセスと捉えられた文化の再生産はもう非常に複雑で不安定なものに化し、人々も自分のアイデンティティーに安定感を付与するために自らの日常を極めて意識的・意図的に自省し、再構成せざるを得なくなったということである。

もちろん、地域によって大小違いはあろう。しかし、このような時代の趨勢が我々の日常に何の影響ももたらさないと切り切れる地域が果たしてあるだろうか。そういう場所はもはやないと仮定しても、我々の日常は当たり前だと捉え続けられるだろうか。管見を述べれば、我々の現在の日常は、当たり前と当たり前ではないもの、気づきにくいものと常に意識すべきものとの間で揺れ動いている。そして、このような現実ゆえに、従来の民俗学とは全く異なる視線で我々の日常を見定めなければならないし、さらに、現在の日常を「日常生活の政治性」のレベルで注目すべき必然性がある。

注

- 1 千鎭基 2007「民俗博物館と現代生活資料」『韓国民俗学』45、300頁（韓国語）。
- 2 Jean Manual de Queiroz・金文謙訳 1994「日常生活の社会学—新しいパースペクティブ—」（“The Sociology of Everyday Life as a Perspective,” *Current Sociology*, March, 37(1), 1989）、朴在煥・日常性・日常生活研究会編『日常生活の社会学』、ハヌルアカデミー、97頁（韓国語）。
- 3 同書、100頁。
- 4 この段落内の以上の引用は、同書、99～103頁。
- 5 同書、99頁。
- 6 王傑文・西村真志葉訳 2014「北京市高層集合住宅の暮らしと生活世界の変容」、ワーキングペーパー『「当たり前」を問う！—日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界—』、49頁。
- 7 Arjun Appadurai・車元鉉訳 2004『手綱から放れた現代性』（*Modernity at large: Cultural Dimensions of Globalization*, the Regents of the University of Minnesota, 1996）、現実文化研究、20頁（韓国語）。